



# 自然遊学館 だより



2006 AUTUMN

No. 41



■2006.10.18 発行 貝塚市立自然遊学館

## ■行事レポート

- 二色の浜 海岸の植物群落を調べよう・・・1
- 二色の浜 大潮の夜の海探検・・・2
- 夏期特別展「近木川の水生昆虫」・・・3
- 自然生態園バッタ調べと鳴く虫・・・4
- 近木川河口の生きもの調べ・・・5
- 千石荘のバッタ採りと鳴く虫・・・6

## ■生きものよみもの

- オナガアシブトコバチ・・・9
- 【泉州生きもの歳時記】
- カヤネズミ 茅鼠・・・11

## ■出前授業報告

- 葛城小学校で生きものの「声」の授業  
・・・12

## ■館長コーナー

- 秋2. 彼岸花も大好きです・・・13

## ■投稿

- トンボ遊学隊「ナニワトンボに  
出会えたよ!!!」 (鈴子勝也)・・・14
- 昆虫調査で貝がらが見つかる?!
- ～トクサオカチョウジガイ～ (鈴子佐幸)・・・15
- ツバメのねぐら発見報告 (石井葉子)・・・16

## ■学芸員実習

- 貝塚市立自然遊学館の実習を終えて  
(古川法子)・・・18
- 遊学館での実習を終えて (山崎晃司)・・・19

## ■寄贈標本の紹介・・・19

## ■遊学館スタッフ日誌・・・22



## ■行事レポート

### 二色浜 海岸の植物群落を調べよう

場所：二色浜

日時：2006年5月20日(土)13:30~16:00

参加者 12名

昨年は全国海岸植物群落調査にともない、二色浜海岸も出現植物を同定記録し、植物分布地図を作成しました。今年は海辺の植物を見て歩く行事を企画しました。この時期は、海浜植物のハマヒルガオ、コウボウシバ、コウボウムギの花の時期です。

見出川よりの砂浜から見て歩きました。階段護岸を降りるとコウボウシバがひろがり、海辺に近付くとハマヒルガオの花の群落、すこし北側には、コウボウムギ、ハマボウフウの株も増えていました。ハマゴウも一株発見。海浜植物のあいだには、荒地の植物、アレチマツヨイグサ、ノミノツヅリ、シロバナシナガワハギ、ネズミホソムギ、シロバナマンテマなどがてんと連なり、オオオナモミの幼株もかたまってでていました。それらをすこしでも減らそうと抜き始めると、参加の子ども達も競うように抜いていきます。

浜中央マストから海にかけての砂浜は、人が多く、植物はほとんどありません。ただ、中央から少し見出川によった砂浜ではオカヒジキが増えていました。

近木川よりの砂浜にいくと、ハマヒルガオがひろがり、ツルナ、オカヒジキ、ハマダイコンがすこしありました。昨年見つけたハマゴウの株は、潮干狩りのフェンスにはさまれて大きくなっていました。

人の多い中央部を除いては、海浜植物群落はひろがりをみせています。

**海浜植物：**くまつづら科ハマゴウ ひるがお科ハマヒルガオ せり科ハマボウフウ あぶらな科ハマダイコン つるな科ツルナ あかざ科オカヒジキ・ホコガタアカザ(帰) かやつりぐさ科コウボウシバ・コウボウムギ

**その他の植物：**きく科ヨモギ・アレチノギク(帰)・オオオナモミ(帰)・ノゲシ・アメリカオニアザミ(帰)・キヌゲチチコグサ(帰)・セイタカアワダチソウ(帰)・トゲチシャ(帰)・ナルトサワギク(帰)・セイヨウタンポポ(帰)・アキノノゲシ あかね科ヘクソカズラ・メリケンムグラ(帰) おおばこ科ヘラオオバコ(帰) ごまのはぐさ科マツバウンラン(帰)・タチイヌノフグリ(帰) ひるがお科ヒルガオ・アメリカネナシカズラ(帰) ばら科ハマナス あぶらな科イヌカキネガラシ(帰)・セイヨウカラシナ(帰)・ナズナ・マメグンバイナズナ(帰) なでしこ科オランダミミナグサ(帰)・シロバナマンテマ(帰)・マンテマ(帰)・ノミノツヅリ・ハマツメクサ あかざ科シロザ・ヤエムグラ たで科アレチギシギシ(帰)・エゾノギシギシ(帰)・ミチヤナギ くわ科カナムグラ にれ科アキニレ あかばな科アレチマツヨイグサ(帰)・コマツヨイグサ(帰) ふうろそう科アメリカフウロ(帰) まめ科コメツブツメクサ(帰)・コメツブウマゴヤシ(帰)・シロバナシナガワハギ(帰)・カラスノエンドウ・ホソバカラスノエンドウ・シロツメクサ・ウマゴヤシ(帰)・メドハギ つゆくさ科ツユクサ かやつりぐさ科ハマスゲ いね科ネズミホソムギ(帰)・ギョウギシバ・チガヤ・イヌムギ(帰)・カラスムギ・ススキ・カモジグサ・ヒエガエリ・スズメノカタビラ

(湯浅 幸子)

## 二色浜 大潮の夜の海探検

場所：近木川河口～二色浜

夏休み恒例になった二色浜大潮の夜の海探検ですが、第1回7月22日は100人の応募者の中から61人が当選、第2回8月12日は86人の応募者の中から64人が当選しました。

### <新月編>

日時：2006年7月22日(土) 16:00～21:00

参加者 70名

雨雨雨の毎日、結果的には翌日も雨で、この日のみ晴れという強運の行事設定日、講師に日本貝類学会会員の児嶋格さん・大阪府水産試験場の鍋島靖信さんと睦谷一馬さんを迎え、多くのボランティア（自然遊学館わくわくクラブ会員・学芸員実習中の近畿大学農学部生など）に支えられて実施しました。

連日の大雨で、川は濁り、流れも速くて生きものの気配に乏しく、前日夕方に、魚の頭などを入れて突堤から放り込んで置いたカニかごも、魚の頭の臭いまで急流に流され留まらなかったようで、過去最も不漁となりました。

参加ボランティア：岡田恵司 岡田尚子 岡田真太郎 北川敏喜 白木茂 鈴子勝也 鈴子佐幸 鈴子達也 鈴子晴久 関根啓勝 坪井成緒 日高学 松浦宣弘 森本静子 矢倉幸代 山崎直



### ● 2006年7月22日「大潮の夜の海探検」で観察された動物リスト

和名	採集法			
	投網	かご網	灯火	その他
有櫛動物 ウリクラゲ			○	
環形動物 サンパチウロコムシ		○		
棘皮動物 イトマキヒトデ		○		
マヒトデ		○		
甲殻類 ケフサイソガニ				○
アカテガニ				○
イシガニ		○		
ユビナガホンヤドカリ				○
イッカクモガニ		○		
ケンミジンコの仲間			○	
貝 キセワタガイ				○
アラムシロ		○		
魚	○			
マハゼ	○			
ボラ	○			
スズキ	○			
ウミタナゴ	○	○		
アイナメ	○			
クサフグ	○			
アミメハギ		○		

### <満月編>

日時：2006年8月12日(土) 16:00～21:00

参加者 80名

前回とはうってかわり日照り続き。ゲストに投網名人林和典さんをお迎えし、ヴェテランボランティアプラス学芸員実習生や実習生 OG で、若やいだ頼もしいスタッフ陣となりました。7月時の反省を活かして細切れスケジュールをやめ、前半に浜辺掃除・救命浮き輪投げ練習と投網練習から夕食まで計2時間余の時間配分を、各班の自由裁量にしました。満ちてくる潮に胸まで浸かりながら、60cm級のメナダを採った班もありました。

後半は、前日夕方、恒例により8つ仕掛けて置いたカニかごを引き上げることから始まりました。一つなくなっていたのは残念でしたが、イシガニやアミメハギが入っていた班もありました。採水した海水をペットボトルに入れ、下から懐中電灯を当ててプランクトンを見るのも人気でした。

班ごとに採集した生きものを、他の班に見せるために置いておくと、大半が死んでしまい、かといって標本にもしないので、

来年はそのようなことのないよう工夫することにしました。

参加ボランティア: 宇都宮政博 岡田恵司 岡田尚子 岡田真太郎 喜多理恵 北川敏喜 小林優佳 酒井寿和 鈴子勝也 鈴子佐幸 鈴子達也 鈴子晴久 関根啓勝 玉乃井省吾 中山寛子 八田美紀 林和典 船本浩路 古川法子 堀真治 松浦宣弘 向江大郎 森本静子 矢倉幸代 山崎晃司

○ 2006年8月12日「大潮の夜の海探検」で観察された動物リスト

和名	採集法			
	投網	かご網	灯火	その他
扁形動物 ヒラムシ類				
棘皮動物 イトマキヒトデ		○		
マヒトデ		○		
甲殻類 ケフサイソガニ				○
インガニ		○		
ユビナガホンヤドカリ				○
ユビナガスジエビ	○			
フナムシ				○
ケンミジンコの仲間			○	
貝 アサリ				○
アラムシロ		○		
タマキビ				○
頭足類 アオリイカ			○	
魚 マハゼ	○			
ボラ	○			
メナダ	○			
クロダイ	○			
スズキ	○			
キチヌ	○			
クサフグ	○			○
アマメハギ		○		

(白木 江都子・山田 浩二)

## 夏期特別展「近木川の水生昆虫」

場所：自然遊学館多目的室

期間：2006年7月29日～8月31日

場所：関空交流館

期間：2006年9月2日～10月1日

自然遊学館の多目的室を、展示物を見ながら一周した感想はいかがでしたか。もし小学生の方が来られたら、解説のパネルは少し難しかったかもしれません。でも標本を見て、「なんかみんな地味やけど、近木川には多くの種類の水生昆虫がいるんやな」

とっていただけたら幸いです。川の上から見るだけでは、これだけの水生昆虫がいることは、なかなか分かりません。

それぞれの種には、それぞれ違った生き方(生活史)があります。どの季節に幼虫になり、何を食べて、何回脱皮して、いつ成虫になり、・・・、といったことを生活史と言います。その他、別の種と餌をめぐる競争し、あるいは、天敵から逃げ、といった具合に、別の種との関係もあります。

貝塚市を流れる近木川にも多くの水生昆虫が生息していて、それぞれの種が独自の生活史をもち、そのそれぞれが多くで結ばれています。そのことに思いをめぐらす一助になればとの思いで、この特別展を開催しました。お忙しい中、足をお運びいただきありがとうございました。



「近木川の水生昆虫」展 於：館多目的室

期間中、貝塚市教育委員会による新任教員研修(自然遊学館の役割、近木川河口の生きもの、投網、畑橋の水生昆虫、秋山川の植物)において、23名の先生方に展示を見ていただき、木積の畑橋で水生昆虫および水生動物の採集を行いました。

8月3日畑橋

(水生昆虫)

チラカゲロウ、キイロカワカゲロウ、シロタニガワカゲロウ、コオニヤンマ、オジロサナエ、ダビドサナエ属、ヒメクロサナエ、シマアメンボ、コセアカアメンボ、ヒゲナガカワトビケラ、コガタシマトビケラ属、ニンギョウトビケラ、マルヒラタドロムシ属 (以上、すべて幼虫)

(水生動物)

カジカガエル、カワムツ、カワヨシノボリ、サワガニ、ミナミヌマエビ、イシビル科、イトミミズ類、カワニナ

なお、近木川の水生昆虫展は、10月3日から自然遊学館多目的室において再開し、11月7日から山手地区公民館に場所を移して展示致します。

(岩崎 拓)

## 自然生態園バッタ調べと鳴く虫

場所：貝塚市二色市民の森自然生態園

日時：2006年9月9日(土) 13:00~21:00

参加者 36名

毎月の第2土曜日に行っている自然生態園作業日に合わせて、バッタ調べと鳴く虫の行事も行いました。まずは草刈りと池そうじ(+ザリガニ釣り)から。次にバッタの原っぱでバッタ調べを行い、バッタ目11種とカマキリ目1種を確認しました。

バッタ調べ (15:00~15:30) 12名

ホシササキリ 成虫1 幼虫2

クビキリギス 幼虫16

ツユムシ sp. 幼虫1

エンマコオロギ 成虫13

ハラオカメコオロギ 成虫1

(オカメコオロギ sp. 成虫2 幼虫1)

シバズ 幼虫2

カンタン sp. 幼虫1

オンブバッタ 成虫3 幼虫3

イボバッタ 成虫1

ショウリョウバッタ 成虫1

マダラバッタ 成虫1 幼虫1

コカマキリ 成虫1

午後7時からは講師に河合正人さんを迎えて鳴く虫の声を聞く行事です。河合先生は、ごく最近に刊行された「バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑」(北海道大学出版会)の編者委員の一人で、その図鑑に付いている鳴き声を集めたCDを多目的室で流して、各種の鳴き声の特徴を解説していただきました。



バッタとコオロギ・キリギリスの鳴き方の違いなどを教わってから、市民の森に出発し、以下のリストに示した種(★印)の鳴き声を聞くことができました。

鳴く虫行事 (19:00~21:00)

- アオマツムシ ★
- エンマコオロギ ★
- ハラオカメコオロギ ★
- ミツカドコオロギ ★
- ツヅレサセコオロギ ★
- ウスグモスズ
- シバズ ★
- マダラスズ
- カネタタキ ★
- ヒロバネカントン ★
- クビキリギス
- ショウリョウバッタ
- チョウセンカマキリ
- コカマキリ



あと、クロゴキブリが歩道を這い回る姿が多くみられましたが、野外のクロゴキブリは意外に人気のある(?)存在のようでした。

(岩崎 拓)

**近木川河口の生きもの調べ**

場所：近木川河口

日時：2006年9月23日(祝) 10:00~15:00

参加者 37名

いくぶん暑さも和らいだ秋分の日、近木川の河口域で自然観察会を行いました。午前10時に館の前に集合していただき、近木川河口左岸のヨシ原まで歩きました。午前中は「カニ釣り」です。ヨシ原に巣穴を作って生息しているカニたちをタコ糸の先に結びつけたタクアンのエサで釣り上げます。

初めて挑戦する人に混ざって、経験者も何名か参加しており、「始めてください」の合図とともに真剣に大物を狙う意気込みが感じられました。エサを落とすやいなや、ハサミで挟んで食らいつくカニや、お腹が空いていないのか無反応のカニなどさまざまなようでしたが、40分間の記録時間で合わせて、ハマガニ57匹、クロベンケイガニ19匹、アシハラガニ1匹が釣り上げられました。カニの甲幅を測定した結果、各種3位までの大物を釣った方の記録を下に記します。

また、毎年カニ釣りを行っている場所ですが、年々、ヨシの群落が広がって、護岸の横までびっしりと生えるようになり、カニ釣りもしにくくなってきていました(エサのタクアンを地面の巣穴まで落とすのが難しい状態)。そこで、行事の前日にスタッフ3人でカニ釣りを行う場所のヨシ刈りを行いました。ヨシを刈ると発泡スチロールやペットボトルなどのゴミがたくさん溜まっていて、ゴミ拾いも行いました。来年はまず、カニ釣りできるようにこうした環境作りから参加してもらえようような行事を取り入れられたらと思います。



**ハマガニ**

1. 植村りょうや ♂ 45.7mm
2. 江本大地・玲子 ♂ 45.6mm
3. 西村みのり ♂ 45.4mm

**クロベンケイガニ**

1. 江本大地・玲子 ♂ 35.1mm
2. 江本大地・玲子 ♂ 34.0mm
3. 梶原あすか ♂ 33.8mm

**アシハラガニ**

1. 江本大地・玲子 ♂ 26.5mm

午後からは海に面した河口左岸での生きもの採集を行いました。この日は午後 1 時過ぎに最干潮で、礫混じりの干潟がちょうど現れています。参加者はバケツを片手に、礫をひっくり返してカニやヤドカリをとったり、波打ち際で貝や魚を探したりしました。この場所の干潟は泥っぽくぬかるんだ場所が多かったのですが、最近は砂泥質の締まった底質になっています。そのためか、ここでは今までほとんど見られていないハクセンシオマネキの姿もぽつぽつと見られました。また、満ち潮時の汀線に打ち上げられた流木、貝殻などの漂着物の転がる砂浜では、例年と比べて多くのスナガニの巣穴がありました。



近木川河口の生きもの観察会		20060923	
		和名	
刺胞動物門	花虫綱	イソギンチャク目	タテジマイソギンチャク
軟体動物門	腹足綱	ニシキウスガイ科	インダタミガイ
			コシダカガンガラ
		タマキビガイ科	タマキビ
			アラレタマキビ
			マルウスラタマキビ
		カリバガサガイ科	シマメノウブネガイ
			ツメタガイ
		アツキガイ科	イボニシ
			カヨメガイ
			アカニシ
		ムシロガイ科	アラムシロガイ
		(有肺亜綱)カラマツガイ科	カラマツガイ
		(淡水産)リンゴガイ科	スクミリンゴガイ
	二枚貝綱	イガイ科	ムラサキイガイ
			ホトトギスガイ
		オミマガシワ科	オミマガシワ
		イタボガキ科	マガキ
			ケガキ
		バカガイ科	バカガイ
		ニッコウガイ科	ヒメシラトリ
		マルスタレガイ科	アザリ
			カガミガイ
		フネガイ科	サルボウガイ
環形動物門	多毛綱	ゴカイ科	アシナゴカイ
		ナオナテイソ科	スゴカイイソメの糞
	貧毛綱	フトミズ科	イソミズ
節足動物門	顎脚綱	まん脚下綱	タテジマフジツボ
			シロスジフジツボ
	軟甲綱	等脚目	アセムシ
		端脚目	ヨコエビ類
		ホンヤドカリ科	ユビナガホンヤドカリ
		ガザミ科	タイワンガザミの脱皮殻
		イワガニ科	クマザシイワガニ
		スナガニ科	ハクセンシオマネキ
脊椎動物門	硬骨魚綱	ハゼ科	ミズハゼ
			ドロメ

凡例 L: 生貝、D: 死殻

(山田 浩二)

**千石荘のバッタ採りと鳴く虫**

場所：貝塚市千石荘

日時：2006年9月30日(土)15:00～19:30

参加者 30名

今年も講師に加納康嗣先生をお迎えして、秋の恒例行事を行いました。千石荘の水田では稲穂が美しく、秋本番といった様子です。まずは明るいうちにバッタ採りをしました。後で、採ったバッタを遠くへ飛ばす「バッタ・オリンピック」をするため、みんなの狙いはトノサマバッタです。ツチイナゴやクサヒバリもたくさん採れました。

その中で、村井さとみさんが採られたショウリョウバッタモドキは、明るい開けた草むらに生息する注目すべき種です。

採集後に、加納先生からバッタの産卵方法（腹部がジャバラのように伸びることなど）、キリギリスとバッタの違い（触角の長さや耳の場所の違いなど）といった話を伺った後、いよいよバッタ・オリンピックの開催です。スタート地点に各自が採集したバッタを置き、翅の先を触って飛ばします。ツチイナゴの部では約 20m 飛ばした吉田侑生君が優勝、トノサマバッタの部 1 回目も約 30m 飛ばした吉田君が優勝（木室仁太君がタイ記録）、2 回目は最長不倒 50m 以上飛ばした酒井智子さんが優勝しました。

夕食後に水路を泳ぐマムシの撮影をして腹ごなしをし、真っ赤な夕日が沈んでいく頃には、昼とは違った種類の鳴き声が聞こえ始めました。加納先生が最低 5 種の鳴き声を覚えましょうといったのは、カンタン、アオマツムシ、マツムシ、エンマコオロギ、ハラオカメコオロギです。



暗闇の中、マツムシが鳴き出すのを待つ

カンタンやマツムシは鳴き声ができるものの、草の中で、なかなか鳴いている姿は見つかりません。上の写真は、なんとかマツ

ムシのオスを見つけ、みんなで鳴き出すのを待っているところです。結局、バッタ採りと鳴き声からバッタ目 24 種、カマキリ目 3 種を確認することが出来ました。以下にそのリストと確認した植物を示しました。帰化植物には\*の印をつけています。

#### バッタ目 24 種

セスジツユムシ、ウスイロササキリ、ホシササキリ、オナガササキリ、クビキリギス、クサキリ、キリギリス、エンマコオロギ、ハラオカメコオロギ、ツヅレサセコオロギ、カンタン、マツムシ、アオマツムシ、クサヒバリ、マダラスズ、シバズ、カネタタキ、オンブバッタ、ツチイナゴ、ショウリョウバッタ、ショウリョウバッタモドキ、トノサマバッタ、ヒシバッタ属の一種、ハネナガヒシバッタ

#### カマキリ目 3 種

オオカマキリ、ハラビロカマキリ、コカマキリ

#### 確認された植物

<きく科>\*オオブタクサ、\*コセンダングサ、ヨモギ、\*アメリカセンダングサ、ヒヨドリバナ、\*セイタカアワダチソウ、\*ヒメムカシヨモギ、アキノノゲシ、\*ヒメジョオン<うり科>カラスウリ、スズメウリ<おおばこ科>オオバコ<きつねのまご科>キツネノマゴ<なす科>\*イヌホオズキ<しそ科>イヌコウジュ<くまつづら科>\*ヒメクマツヅラ<うごぎ科>メダラ<あかばな科>\*アレチマツヨイグサ<ぶどう科>ヤブガラシ<とうだいぐさ科>アカメガシワ、エノキグサ<まめ科>クズ、ヤブマメ<やまごぼう科>\*ヨウシュヤマゴボウ<ひゆ科>ヒナタイノコヅチ、\*ホソアオゲイトウ、\*ホナガイヌビユ<いらくさ科>コアカソ、ヤブマオ、カラムシ<あかざ科>シロザ<たで科>オオイヌタ



デ、サナエタデ、イヌタデ<くわ科>カナムグラ<やまのいも科>ヤマノイモ<ひがんばん科>ヒガンバナ<つゆくさ科>ツユクサ<かやつりぐさ科>カヤツリグサ、コゴメガヤツリ、ヒメクグ、ヒデリコ<いね科>エノコログサ、ケイヌビエ、キンエノコロ、アキノエノコログサ、\*セイバンモロコシ、チカラシバ、オヒシバ、メヒシバ、イヌビエ、カゼクサ、ススキ、\*シマスズメノヒエ、\*オオクサキビ、アゼガヤ、ヨシ、メダケ<とくさ科>スギナ (植物の同定：湯浅幸子)

### バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑

先月、北海道大学出版会から刊行された「バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑」(定価本体 50,000 円)は、日本直翅類学会編集で、編集委員は市川顕彦、伊藤ふくお、加納康嗣、河合正人、富永修、村井貴史の各氏です。著者を代表して加納先生が「はじめに」を書かれ、それによると、1978 年の日本直翅類研究グループ発足当初、200 種未満だった種類数が、本図鑑では 470 種・亜種を越えて分類されているそうです。この図鑑は日本のバッタ目研究における現時点での集大成と言えます。

その美しい標本写真からは、日本のバッタ目がこんなに形態的に多様で、体色の美しいものもあったのかと、改めて驚かされます。バッタ、コオロギ、キリギリスという言葉からふつうに連想される範囲を越えたものも含まれています。開けてびっくり玉手箱です。かつ、まじめ一辺倒の堅い図鑑かというところではなく、いくつか遊び心もみられる箇所があります。また、採集法、飼育法、標本作製法も丁寧に解説され

ています (バッタ目標本の緑色を残すのはたいへん難しいことなのです)。採集にナギサ・ゾロゾロもぜひ試みてください。一網打尽だそう。この図鑑の刊行によって、チョウやトンボ、カブトムシやクワガタムシに比べてマイナーだった「バッタ目」のファンが増えることと思います。また、新たにバッタ目の分類を研究しようという方が現れるかもしれません。

本図鑑によって従来の分類が変更されたものがあり、自然遊学館所蔵のバッタ目標本を見直す必要が生じました。例えば、先のリストでは単に「キリギリス」と書きましたが、大図鑑の記載によると、翅と生殖下板の形態から自然遊学館所蔵の千石荘の標本 (1♂) は「ニシキリギリス」と同定されます。貝塚市馬場産の 1♀もニシキリギリスでした。それに対して、和泉市信太山産の 1♂1♀は「ヒガシキリギリス」と同定されました (生殖下板の形態がこんなに違っていただけですね)。大図鑑には資料編として都道府県別分布が掲載されていて、大阪府にはニシキリギリスとヒガシキリギリスの両種が分布していることが示されています。キリギリス以外にも再検討しないといけない標本があり、その結果は、自然遊学館だよりで随時、発表していく予定です。

(岩崎 拓)

## ■生きものよみもの

### オナガアシブトコバチ

8月15日に貝塚市の千石荘において、オナガアシブトコバチ（以下、コバチ）のメス成虫を1個体採集しました。ここでは、体長4mmにも満たない小さなハチがどうい生活を送っているのか紹介します。

#### 1. カマキリの卵に寄生するコバチ

春先に採ったオオカマキリの<sup>らんのおう</sup>卵囊から体長3~4mmの小さなハチが出てくる場合があります。それがオナガコバチ科のオナガアシブトコバチ *Podagrion nipponicum* で、腹の先に体長と同程度の長い産卵管を持っているのがメスです（図1）。これを卵囊の表面から突き刺し、中のカマキリの卵に産卵します。かえったコバチ幼虫は<sup>きせい</sup>寄生生活を送り、寄生を受けたカマキリの卵は死んでしまいます。



図1. オナガアシブトコバチ♀成虫

たとえば、千石荘で1996年に行った調査では、寄生を受けたオオカマキリの越冬卵囊の割合は11.1% (3/27)、性比は♂11:♀32でした（岩崎、2000）。ただし、オオカ

マキリの卵囊には平均して200弱の卵が入っていますが、卵囊内のすべての卵が寄生されることは、これまでの観察ではありませんでした。

#### 2. 生活史

春先に<sup>うか</sup>羽化（=成虫になること）した越冬世代のコバチ成虫は、まだふ化（=卵から幼虫になること）していないオオカマキリの卵囊や、ふ化時期が約1ヶ月遅いチョウセンカマキリの卵囊に産卵します（図2）。この子ども（=第1世代）や孫（=第2世代）は晩春から初夏に羽化します。これら第1、第2世代の成虫は、秋にオオカマキリが産卵するまで、暑い夏をやり過ごす必要があります。それは、夏には卵の入った卵囊がないからです（後述）。

ハチミツ水溶液を与えて飼育した場合、越冬世代のコバチ成虫は夏を越すことができませんでしたが、第1、第2世代の成虫は夏を越すことができました（Iwasaki, 2000）。ただし、第1、第2世代がチョウセンカマキリ卵囊を利用できるのに、それらが秋にチョウセンカマキリ卵囊に産卵しない理由は、いまだに分かりません。

とにかく、このコバチの生活史から推測されることは、オオカマキリのみが生息する場所よりも、両種のカマキリが共存している場所ほど、ふ化時期が遅いチョウセンカマキリの卵囊を利用できる分、秋まで生き延びるコバチ成虫が多いということです。

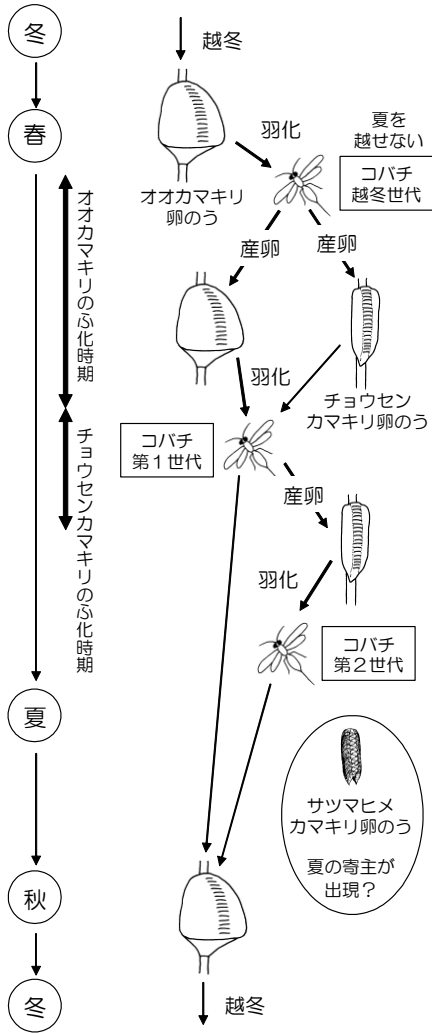


図2. オナガアシフトコバチの生活史

### 3. チョウセンカマキリの減少

千石荘では、ため池の改修工事用の仮道整備、二次林の遷移の進行などによって、開けた草地が減少、あるいは乾燥化し、クルマバッタ、ショウリョウバッタモドキ、チョウセンカマキリが少なくなっています。前年（2005年）の調査では、チョウセンカマキリをまったく確認できませんでした。チョウセンカマキリが少なくなることは、コバチにとっては不都合なことです。反対

に、オオカマキリにとっては、競争相手のチョウセンカマキリが少なくなるし、寄生者のコバチは減るしで、都合のいい面もあります。人間の活動の変化によって、カマキリ（寄主）とコバチ（寄生者）のバランスが影響を受けるということです。そして、今のところ、コバチにとっては好ましくない方へ変化しているものと考えられます。

### 4. 夏に利用できる寄主出現？

千石荘では、6月24日にサツマヒメカマキリのメス成虫が確認されました（図3）。貝塚市内では、水間、蕎原に続いて3個体目となります。元々、和歌山県には生息している（後藤、2000）、このカマキリも、以前の号（第32号：2004）で紹介したナガサキアゲハのように、温暖化によって分布を北へと拡大しているのかもしれませんが。



図3. サツマヒメカマキリ♀成虫

このカマキリは春に成虫が出現し繁殖することから、夏に卵が入った卵嚢が存在することになります。それを寄主として利用できるのなら、コバチの第1、第2世代が夏をやり過ごす経路のほかに、第3世代がサツマヒメカマキリの卵嚢を利用できる可能性が生まれます。これはコバチにとって非

常に有利なことです。コバチのメス成虫は卵囊があれば複数の卵を産み付けることができるので、コバチ個体群にとっては秋に生存する成虫の数が増えることが予想されます。

このようにカマキリの卵囊を利用するオナガアシブトコバチという小さな寄生バチを考えても、環境の変化や他種との関係が複雑に絡み合っていることがお分かりいただけたと思います。たとえば、人間の都合のいいように、「ある種」だけ、あるいは「あるグループ」だけを増やすということは非常に難しいことで、それはまた、そのような複雑な関係をいったん壊してしまうと、二度と復元できない可能性が高いということでもあります。私たちが知っていることは、千石荘の自然のほんの一部にすぎません。まだまだ解決されていない「パズル」が残されています。それが解かれる前に千石荘の自然が開発によって根こそぎ壊されないようにしたいものです。

注：カマキリの卵囊からヒメオナガアシブトコバチ *P. philippinense cyanonygrum* という別の種が出てくることもあります（山崎・岩崎、2002）。

#### 引用文献

- 後藤 伸 (2000) 「虫たちの熊野—照葉樹林にすむ昆虫たち」. 紀伊民報社.
- 岩崎 拓 (2000) *Jpn. J. Ent.* 3(2):65-70.
- Iwasaki, T. (2000) *Ent. Sci.* 3(4):597-602.
- 山崎一夫・岩崎 拓 (2002) *Jpn. J. Ent.* 5(2):25-27.

(岩崎 拓)

## 【泉州生きもの歳時記】

### カヤネズミ 茅鼠

草はらわがさがさとかきわけていくと、草に作られた鳥の巣のような丸いかたまりが見つかることがあります。これはカヤネズミという小さなネズミの「家」です。



入り口が見えた壊れかけの巣  
(2006年1月26日 蕎原箱谷にて撮影)

カヤネズミは体重 7 グラム程の日本最小のネズミです。河川敷の草原や田畑の畦などイネ科植物の優占する草地に暮らし、オギやススキなどの葉を細く裂いて写真のような巣をつくり、「草上生活」をします。これからは子育ての季節。秋の草刈りや稲刈りの時期と重なるため、イネの間から小さなネズミの赤ちゃんが飛び出てびっくりした経験を持つ方もいらっしゃるのではないのでしょうか。私の母は、稲刈りのときこのネズミをいつも「ネコのお土産」にしていたそうです。数十年前の日本にはごくふつうに見られたこのネズミですが、現在は多くの都道府県で絶滅危惧種、大阪府下でも要注目種とされ最近急に数を減らしています。最近の大阪の大和川水系での調査では、分

布は意外と広がったものの、それぞれの生息地の規模は小さく、他の生息地と分断され、種を維持するのに必要な数がいらないにくい場所も少なくなかったそうです（大阪市立自然史博物館, 2006）。カヤネズミは移動する力が少なく、生まれた草地が開発などで消失すると新しい場所へ行くことができません。貝塚市でも大小の開発で生息地の草地が減少しているいま、数を減らしているといえるでしょう。

とはいえ、みなさんの自宅の近くにもひっそりと残っているかもしれません。これからの季節、「これは？」と思う巣を見つけたら、遊学館にお知らせください。

#### 参考文献

大阪市立自然史博物館（2006）「第35回特別展 大和川の自然」。大阪市立自然史博物館。

（西澤 真樹子）

## ■出前授業報告

### 葛城小学校で生きものの「声」の授業

7月3日、三ヶ山にある葛城小学校分校に出前授業に行ってきました。今回で2回目となる出前授業では、生きものの「声」をテーマとし、夏鳥の声とカエルの声のCDを持っていきました。

毎回、導入では貝塚に住む様々な生きものを直接見てもらおうと、遊学館で飼育したり、調査で捕獲したりした生きものを連れて行っています。今回はアカネズミとヒメネズミを連れて行きました。ネズミを見

た子どもたちからは「かわいっ！」「目が大きい」「でも、くさーい！」といった声。「野ネズミのオシッコのにおいを知っているなんて、すごいことだからいっぱい嗅いで覚えてね」と言うと「えー！」といいながらけっこう熱心に嗅いでいました。

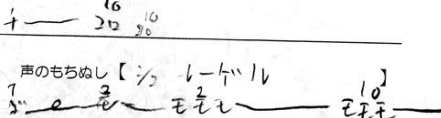
さて、教室では子どもたちにプリントを配りました。生きものが出す「声」を、自分なりの言葉で書き取ってもらうのです。字ではなく抑揚を線で表現してくれた人もいました。これはなかなか本格的です（実はシカの鳴き声調査をするとき、同じように抑揚をメモすることがあるからです）。

たとえばヌマガエルは

声のもちぬし【ヌマガエル】  

 こんな感じ。

こちらは上の段がシュレーゲルアオガエル。

声のもちぬし【シュレーゲルアオガエル】  


下はウシガエルです。数字が書きこまれているのが特徴的です。

以下に子どもたちの書いてくれた「声」を載せました。個性あふれる書き取りの数々、みなさんはどんな生きもののか、わかりますか？（答えは最後にあります）

- ①ホーコケピー・ピコピコピコピコピコ／ホーコケキョ・キコキコキコキコ
- ②カッコ×16／ホッホ／カーコカーコカーコカーコ／キュッキュッキ
- ③ケホキョホキョ／ホキョキョキョキョ／キキキキキキ
- ④ピピー／ススススススス／チチュチュ／チュリリリ／チョチョチョ



- ⑤グワグワ／ぎこぎこぎこぎこぎこぎこぎこ／  
 グワグワ／ゲル×8ゲ×8ゲル×8／ゲゴゲゴ  
 ⑥コココぶー／ゴォーンゴォーンゴゴゴゴゴ  
 ⑦コココ／ギリリー／キュルキュルキュルキュ  
 ル／キリリリ／ゲろろろー／コココガラガラ  
 ⑧ルルル／ズズズズズズズズズズー／もう  
 うー／ぶー／グー・グー／グーウグーウグーウ  
 ⑨ギコギコ／ゲギゲギゲギ／コエコエ  
 ⑩グレグレグレグレ／ショウー／ちゅい  
 ちゅい／グレーココココココ

教室の話のあとは、学校の回りに生きもの探しに行きました。蚊が多くてちょっと大変だったひともいましたが、ホオジロやカナヘビを見つけて楽しみました。

答え：①ウグイス②カッコウ③ホトトギス④キセキレイ⑤ニホンアマガエル⑥ツチガエル⑦シュレーゲルアオガエル⑧ウシガエル⑨ヌマガエル⑩カジカガエル

(西澤 真樹子)

## ■館長コーナー

### 秋 2. 彼岸花も大好きです

二上山の谷部を奈良の方に向かいます。その周りはススキの世界です。白やピンクのオバナが風になびきます。秋 1 では大峯山系の紅葉を載せさせていただきました。紅葉は大好きです。その前哨戦となるススキも大好きです。ススキが登場したついでに申しますと、やはり名所は曾爾高原でしょう。岩湧山、生石高原、大和葛城山と他にも好い所がたくさんあります。でも、こ

の竹内街道とりわけ二上山付近は圧巻です。気分がすうっとして何度通ってもこの季節は感激です。最近この道路に重なるように南阪奈道路ができましたが、高速道路より、この街道の方が数段に爽快です。

その竹内街道が當麻寺付近と接した地点を南下します。葛城山の裾野を縫うように県道を走ります。ちょうどロープウェイのある下側付近は今回の主人公で一杯です。主人公、そう実は「彼岸花」なのです。強烈な花なのになぜか5、6年前までは関心はありませんでした。しかし、最近はこの彼岸花の咲くのが待ち遠しくなってくるのです。それで9月19日(火)、彼岸花との再会に胸躍らせて出発したのでした。

彼岸花という花は不思議で一杯です。秋の彼岸になりますと、本当に思い出したように突然姿を現します。茎が地面からのこのことと伸びてきたかと思うまもなく花をひろげます。花は4、5日もすれば枯れてしまい、茎だけがしょんぼり残ってしまいます。花は、これもまた独特です。美しいといえば美しい、不気味といえば不気味、そんな感じですが。私は現在もう不気味という感じは全くなくなって、本当に美を感じています。

別名「曼珠沙華」、たぶん仏典の言葉と思うとおり「天上の花という意味で、めでたい赤い花が天上からふってくる、すなわちよいことが起こる前兆であることを示しているよう」です。しかし、私たちは「毒のある怖い花だから触らないように」と教えられてきました。それで、不気味なイメージが出来上がったのでしょうか。確かに、原色日本植物図鑑(保育社)によりますと、

鱗茎にあるリコリンは有毒と記載されています。ところが、これを7回ほど水洗して除けば食べられるでんぷんになるとあります。

昔、何かで読んだか、誰かに聞いたのか全く忘れてしまいましたが、彼岸花には毒があるから近づいたり、触ったりしてはだめだよ、と教えられた記憶があります。これはおそらく、大昔（いつというのではなく、かなり昔）から語り継がれてきたことではないかと思われるのです。本当に毒があるのですから、一度インプットすると、もうその考えは離れなくなります。ちなみに、ドクバナとか、ニガバナ、イチヤコロリという言い方もあるようですから、毒ありはなお一層鮮明です。

そして、本当に食べるものがなくなったとき、鱗茎を掘り出してすりつぶし、でんぷんを沈殿させ毒をさらして食したことでしょ。この製法は村長とか一族の長とかが伝承されていたと推測されます。通常の何とか食べられるときに採りさらなければ、地面一杯に群生する性質がありますから、大量の食料ができたことでしょう。このように飢饉のときに食べる食料を救荒植物というようですが、人間の生きようとする力が知恵を生み出したのでしょ。そうして現在があるのです。現在は飽食の時代です。でも、それを生み出したのはまぎれもなく先人の生死をかけたぎりぎり生活からです。

そんなことを考えながら、大和葛城山のロープウェイ下の棚田を、県道から立体的に見ることができます。近隣ではここが一番見事に咲き乱れるポイントと私は思っています。しかし、今年はあせって早く行き

過ぎたのでしょ。彼岸花はまばらにしか咲いていませんでした。

それから一週間後、この泉州地域で近年見たことのないほど素晴らしく咲き競いました。紅葉だけでなく、ススキも彼岸花も大好きです。これはちょっと変なのではうか。

(川村 甚吉)

## ■投稿

### トンボ遊学隊

#### 「ナニワトンボに出会えたよ!!!」

7月17日月曜日、小雨降る中、天満隊長と僕とお母さんの3人でトンボ遊学隊として千石荘のある池にトンボ調査に行きました。近くにコナラの木があり、樹液が出ていて、そこに、カナブン、クワガタ、蝶がいました。池の上にはチョウトンボ、オオシオカラトンボ、アオイトトンボ、ヤンマが飛んでいました。

突然、お母さんが「木に青い物ついてない？トンボと違う？」と聞いてきたので、天満さんと僕は「あれはゴミですね。トンボと違うわ。」っといい、お母さんも「そうやね。トンボと違うといわれたらそう見えるわ。」と納得した様子。

すこし、時間がたちいろいろなトンボを獲り、また木の先を見てみると、木にとまっていた、青い物が動いていたからビックリしました。デジカメで写して見ると約6年間見つからなかった、ナニワトンボでした。僕たち3人は大喜びしました。

けど、ナニワトンボがいるところまで、

少し距離があり、草もいっぱい生えていたので、無理やり道を作ってそこまでいきました。捕虫網をふるときは、すごく緊張しました。捕虫網をふったあと、すぐに広いところまでもって入っているか見てみました。入っていたからすごくうれしかったです。



捕まえたナニワトンボ♂

貝塚市立自然遊学館所蔵ナニワトンボ成虫標本のデータ  
(貝塚市内で採集された標本)

性別	採集日	採集者	採集場所
♂	1992. 9.13	宮武 頼夫	千石荘牛神池
♂	1992. 9.13	橋本 夏次	半田海岸寺山
♂	1993. 8.28	橋本 夏次	千石荘のため池
♂	1993. 8.29	橋本 夏次	千石荘のため池
♂	1994. 8.14	北田 誠	千石荘牛神池
♂	1995. 9.24	北田 誠	千石荘養護学校横
♀	1995. 9.30	宮武 頼夫	馬場
♂	1995.10.30	橋本 夏次	千石荘池
♂	1999. 7.25	天満 和久	千石荘牛神池
♂	1999. 7.31	松田 勲	千石荘ボタン池
♂	2000. 7.13	堀 真治	千石荘牛神池
♂	2006. 7.17	鈴子 勝也	千石荘牛神池

すぐに自然遊学館に持っていき、今はもう、標本になっています。約 6 年間も見つかっていなかったのですが、貝塚にはもうナニワトンボはいないのかな？と思っていましたが、いることがわかりよかったです。来年は、『ナニワトンボに会いたいな！』という

企画をぜひ実現して欲しいと思います。天満隊長、よろしくお願いいたします。

(鈴子 勝也)

## 昆虫調査で貝がらが見つかる?! ～トクサオカチョウジガイ～

2006年9月9日(土)、定例の自然生態園作業の日、バッタの原っぱで昆虫調査を実施すること。15:00~15:30の30分間の間にいかに多くの昆虫を見つけることが出来るのだろうか?わくわくしながら参加しました。

ショウリョウバッタにエンマコオロギ、オンブバッタなど、次々に目の前を横切っていくのになかなか捕まえることが出来ない。草をめくると小さな虫たちが跳び出して来る。でも、素早く捕まえることが出来ない。天気は快晴で9月だというのに、気温は30℃を超えている(?)なか、バテバテになりながら虫を探しました(30分間は短く感じるけど、晴天の中では、さすがにしんどい)。

これは、動き回るのではなくどこか一箇所に座り込んで探したほうが良いと考え、ドングリの森近くのススキの株の下を探することにしました。ススキの葉をめくってみると、ナ、ナント貝がらがあるではありませんか。貝がら好きの私としては、採集しないわけがなく、昆虫そっちのけで(ごめんなさい!!)貝がらを採集しました。1個体なら気にしなかったかもしれませんが、探していると数個体見つかりました。もし、これがオカチョウジガイだったら、ヒメボ

タルを見ることが出来るかも、と期待は膨らむばかり。でも、陸産貝になじみのない私には、何貝かさっぱりわからず、貝の先生である児嶋格先生に同定していただきました。答えは、「トクサオカチョウジガイ」。



**トクサオカチョウジガイ**  
(右下のスケールは1mm)

トクサオカチョウジガイは、外国からの移入種で、シダ植物の木賊[トクサ]に似た明瞭な成長脈があることが、この和名の由来です。湿潤から乾燥まで、低い山地から市街地に至るまでの多様な環境に適応し、枯れ草の堆積下や植木鉢の下などに群がって棲息するそうです。

なるほど、ススキの葉の下にいてもおかしくないんだ。と思いました。今度は、ぜひ生きている貝を探したいと思っています。

今回、貝の同定にあたり、多忙な児嶋先生にお世話になったことをこの場をおかりしてお礼申し上げます。ありがとうございました。

参考文献

『大阪府陸産貝類誌』松村勲・著 近未来社。

(鈴子 佐幸)

**ツバメのねぐら発見報告**

2006年8月末に、貝塚市でツバメの集団ねぐらを発見したので報告します。

ツバメは3月頃に日本にやって来て、民家の軒先など人工の建築物に、泥や枯れ草に唾液を混ぜたものを材料にしてお椀型の巣を作ります。巣が完成すると産卵、抱卵し、2週間程で孵化し、その後20日間位でヒナが巣立ちます。繁殖の回数は、1シーズンに1、2回です。

巣立って独り立ちした幼鳥や、その年の繁殖を終えた成鳥は、もう巣には戻りません。昼は採餌し、夕方になるとヨシ原などに集まり、そこで夜を過ごします。

こういう風に、夜、鳥達が眠る場所を「ねぐら」と言い、集団で眠るような場合は「集団ねぐら」と呼びます。ツバメの場合、夏には数千、数万羽が集まる大規模な集団ねぐらも見られます。例えば、京都の宇治川、奈良の平城宮跡や、大阪北部の豊里の集団ねぐらがよく知られています。たくさんのツバメがどこからともなく集まってきて、空を飛び交う様子はとても迫力があります。

ツバメの集団ねぐらのピークは7月下旬から8月中旬にかけてで、10月頃になると、ほとんどが南へ渡ってしまいます。

また、ツバメはねぐらの場所としてヨシ原を特に好みますが、電線や、街路樹で眠るケースも観察されています。

さて、大阪南部のツバメの集団ねぐらについては、かつては岸和田市の七ツ池や流木今池、泉佐野市の奥池、十二谷池などにあることが確認されていましたが、いずれも現在は使われておらず、ここ数年は、ツ

バメの集団ねぐらの所在は行方不明の状態にありました。

今回発見した場所は、貝塚市麻生中の唐間池南側にあるヨシ原です。池と田んぼに挟まれた小規模なヨシ原で、一見、たくさんのツバメ達がやって来るようには見えません。

発見の経緯は次のとおりです。

まずは8月20日の夕刻、車で清児のあたりを走っていると、道路脇の田んぼでツバメが飛び交っていました。繁殖の時期も終わり、街中でツバメを見かけることが少なくなっていたので、この時間にこのあたりでうろうろしているということは、ひょっとしたら近くにねぐらがあるのかな？と思いました。

つぎに、8月26日の夕方、橋本の近木川付近を歩いていると、上空を数十羽のツバメの群れが北東の方角に向かって飛んでいくのが見えました。これはますますねぐらのおいがしてきたので、家に帰って貝塚市の地図を見てみると、ツバメの群れが飛んでいった方向には、大池、新池などのため池があります。もしこれらのため池にヨシ原があれば、ツバメのねぐらになっている可能性があると思いました。

そこで、8月30日に追跡調査を行うことにしました。大池のあたりまで自転車で行き、ツバメが飛んでいくのを見つけたら、ひたすら追いかけていこう、という行き当たりばったりの計画です。18時ごろに橋本をスタート、しばらくして大池のある田畑地帯に差し掛かると、南の方からツバメがやってくるのが見えました。懸命に自転車をこぎますが、ツバメのスピードに勝てる

はずはなく、あっという間に追い越され、姿はどんどん小さくなっていきます。

このままでは見失ってしまう、どうしよう～、と焦っていると、なんと、後ろから次々とツバメがやってきて、私を追い抜いていくではありませんか。あとからあとからどんどんやってくるので、これなら追跡できるかも、と思いました。

やがて、大池より少し北側の上空でツバメたちが旋回し始めました。私には天の助け、距離をつめます。やはり大池がねぐらなのかな、と思い池端に上がってみると、予想に反してヨシ原は見当たりません。新たにやってきたツバメたちは、大池をびゅんびゅん通過していきます。私のすぐそば、目の高さを飛んで行くツバメもいて面白い！

ツバメたちは、やがてさらに北に向かいました。ここでようやく、「ひょっとして堂ノ池の辺り！？」と思い当たり、そちらへ向かうことにしました。



夕暮れの唐間池（撮影・石井葉子）

そして18:25頃、堂ノ池に到着すると、隣接する唐間池の南側にあるヨシ原と周辺の田んぼ一帯をツバメたちが飛んでいます。



まだ辺りは明るいですが、目算で数百羽はいるでしょうか。すごいすごい、と感動している間にもどんどん数が増えてきて、18:40頃には、数千羽のツバメが飛び交う一大スペクタクルに。貝塚市の小さなヨシ原に、こんなにたくさんのツバメが集まるとは驚きです。

日が暮れ始めると、ツバメたちはヨシ原に降り始めました。普通は暗くなる頃には皆ヨシ原に降りて静かになるのですが、この日は寝つきが悪いのか、場所に入りきらないのか、19:00を過ぎて辺りがすっかり暗くなっても飛び続けているツバメもいました。まだ飛んでいるツバメの鳴き声を聞きつつ、帰りました。

その晩さっそく遊学館に報告し、翌日、宮本さんと西澤さんと3人で見に行くことにしました。3人ともカウンターを持参し、何羽位いるか数えるつもりでしたが、到着した時にはもうたくさん集まっていて既にヨシ原に降りているツバメもいたので、数えられずじまいでした。面白いことに、近くの雑草（セイタカアワダチソウ？）にとまっているツバメもいました。

また来年、ツバメたちが戻ってきたら、観察に行きたいと思います。

小さな観察を積み重ね、今回の発見に至りました。鳥を見つけたら、「あ、ツバメがいる、スズメがいる」と思うだけではなく、それらの鳥たちが何をしているのか、ということにも関心をもって観察して見てください。すばらしい発見があるかも知れませんが、

(石井 葉子)

## ■学芸員実習

### 貝塚市立自然遊学館の実習を終えて

8月9日～19日の10日間、貝塚市立自然遊学館のみなさんには大変お世話になりました。実習が始まる前はとても不安でしたが、始まってみればあつという間の10日間でした。

自然遊学館での体験は私にとって初めて体験することばかりで、戸惑ったりもしましたが、自然遊学館のみなさんに指導して頂き、近木川へ水生昆虫の採集へ行ったり、植物採集へ行ったり、剥製標本にしたりと、様々な事を体験し、学ぶことができました。

「大潮の夜の海探検」では、参加者のみなさんと一緒に自分も楽しんでしまいました。

今回の実習を終えて、感じたのは学芸員の仕事とは、とても幅広く、事務的なことから専門的なことまで多くの仕事をこなしていかなければならないということでした。また、実習中には生き物や植物などの質問をしに来る人たちをよく見かけました。地域の人々との関わりも多く、博物館に来る子供達は貝塚の自然が好きなのだと感じました。実習を通して、私も少しだけ、貝塚の自然に触れることができたと思います。

わずか10日間でしたが、貝塚市立自然遊学館で実習させて頂き、本当によかったと思います。今回の実習で体験したことを今後、生かせるように頑張っていきたいと思っています。ありがとうございました。



(近畿大学農学部農芸化学科 古川 法子)

## 遊学館での実習を終えて

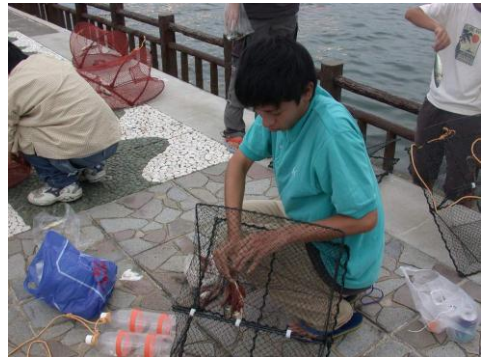
8月9日から19日までの10日間という短いようで長い実習期間でお世話になりました。いくまで学芸員というイメージは冗談も通じない様なおカタイ人ばかりかと勝手に想像していたのですが、遊学館に行ってその考えは180度変わりました。すごくアットホームな感じで少し言い方が悪いかもかもしれませんがサークルの雰囲気という感じ、そしてスタッフ皆さんのキャラが良い意味で濃いナイスな博物館でした。(笑)

実習内容とはいうと、夜の海探検までは投網関係がメインで、修理や投網の投げ方、魚が採れる仕組みなどを教え込んで頂きプチ漁師さんの気分が味わえる内容。行事後は山田さんと水生昆虫採集や西澤さんとはく製作、湯浅さんによる遊学館周辺の植物採集プラス講義等多彩なメニューが用意されていて実習というより行事みたいで楽しかったです。しかし当然ながら資料整理などの事務もありました。けどすべてが初体験で新鮮に感じられました。自分が体験したのは実際行われている業務のごく一

部であり、これらの仕事をこなしているスタッフの皆さんは体力的にも精神的にも強いなと感心するばかりでした。

この実習での得た事は、博物館で学芸員となって働くということはこんな感じかなというイメージができたことと、実習なのにとっても楽しかったということなどと本当にいろんな事を得ること感ずることができました。

こんなに学べたのは遊学館だからこそ！ほんまに遊学館でよかった！！と思える実習でした。10日間お世話になりました。またふらっと顔を出しに行きます。本当にありがとうございました。



(近畿大学農学部農学科 山崎 晃司)

## ■ 寄贈標本の紹介

以下の方々より標本を寄贈していただきました。お礼申し上げます。

(※2006年9月分まで)

### <哺乳類>

◆古里勝伸さんより

ニホンジカ 落角2点

箕面市箕面公園風呂谷

2004年10月及び2005年11月拾得

<鳥類>

◆大槻優貴さんより

ドバト 卵 2点

貝塚市二色 K I A

2006年8月21日拾得

<両生類>

◆稲谷吉則さんより

ヒキガエル 生体1点

貝塚市馬場 2006年7月8日採集

<魚類>

◆花野晃一さんより

タカクラタツ

生体1点



ハリセンボン 生体1点

以上、兵庫県洲本市由良 2006年7月採集

◆鈴子佐幸さんより

アサヒアナハゼ 生体1点

岬町深日沖 2006年7月30日採集

◆小野雄大さんより

キチヌ 生体1点

ドロメ 生体1点

二色浜 2006年8月13日採集

◆岡村親一郎さんより

ハナオコゼ 生体1点

泉佐野フェリー発着場

2006年9月15日採集

◆河野通浩さんより

ドジョウ 生体4点

岸和田市土生町二丁目

2006年9月20日採集

<軟体動物>

◆浜谷 巖さんより

ナミギセル 5点

岸和田市別所町 2006年8月1日採集

<棘皮動物>

◆食野俊男さんより

サンショウウニ 生体1点

貝塚市二色南町

◆鈴子佐幸さんより

トゲモミジ 生体1点

岬町深日沖 2006年7月30日採集

<甲殻類>

◆寺田拓真さんより

チチュウカイミドリガニ 生体1点

テッポウエビ 生体1点

二色浜海浜緑地 2006年8月14日採集

◆柴田健人さんより

サワガニ 生体2点

貝塚市木積 2006年9月25日採集

<昆虫>

◆川元誠太さんより

ホシカレハ成虫1点

貝塚市地藏堂 2006年7月1日採集

◆森本静子さんより

スズキシヤチホコ 成虫1点

貝塚市澤 2006年7月10日採集

セミ類6種(成虫と羽化殻)

アブラゼミ

クマゼミ

ミンミンゼミ

ニイニイゼミ

ヒグラシ

ツクツクボウシ

のアクリル封入標本

◆檀原市昆虫館より

アマミナナフシ 成虫 4 点  
(1♂3♀ : 飼育個体)

◆箕面昆虫館より

タガメ 成虫 8 点  
(飼育個体)

◆濱谷巖さんより

スズムシ 成虫多数  
(飼育個体)

◆福本泰承さんより

スズムシ 成虫多数  
(飼育個体)

◆青柳正人さんより

フタバコカゲロウ成虫 1 点  
ナミトビイロカゲロウ成虫 1 点  
オニヒメタニガワカゲロウ成虫 1 点  
タニヒラタカゲロウ成虫 1 点  
ヒロアタマナガレトビケラ成虫 1 点  
トランスクィラナガレトビケラ成虫 2 点  
ツメナガナガレトビケラ成虫 1 点  
ウルマーシマトビケラ成虫 2 点  
以上、貝塚市蕎原 2005 年 4 月 28 日採集  
クレメンスナガレトビケラ成虫 1 点  
ヨシイナガレトビケラ成虫 1 点  
シロズシマトビケラ成虫 2 点  
ニンギョウトビケラ成虫 1 点  
以上、貝塚市蕎原 2005 年 5 月 25 日採集  
シロタニガワカゲロウ成虫 1 点  
クレメンスナガレトビケラ成虫 1 点  
ガロアシマトビケラ成虫 1 点  
アミメシマトビケラ成虫 2 点  
ホソバトビケラ成虫 1 点  
以上、貝塚市蕎原 2005 年 6 月 16 日採集  
ガガンボカゲロウ成虫 1 点  
チラカゲロウ成虫 1 点

フタスジモンカゲロウ成虫 1 点

以上、貝塚市蕎原 2005 年 9 月 21 日採集

◆鈴子勝也さんより

ナニワトンボ♂成虫 1 点  
貝塚市千石荘 2006 年 7 月 17 日採集  
ウスバキトンボ♂成虫 1 点  
貝塚市二色 2006 年 9 月 9 日採集

◆江本大地さんより

キボシアシナガバチの巣 1 点  
泉南市新家 2006 年 7 月 28 日採集

◆辻悠平さんより

ヘラクレスオオカブト♀成虫 1 点  
エクアドル産 (飼育品)

◆山口隼平さんより

コブマルエンマコガネ♀成虫 1 点  
貝塚市橋本 2006 年 8 月 11 日採集

◆佐々木仁さんより

ヒトスジアラゲカミキリ成虫 1 点  
貝塚市馬場 2006 年 5 月 6 日採集  
ヨツスジトラカミキリ成虫 1 点  
貝塚市蕎原 2006 年 7 月 29 日採集  
センチコガネ成虫 1 点  
貝塚市蕎原 2006 年 8 月 5 日採集

◆西村恒一さんより

オオムラサキ♂成虫 1 点  
貝塚市梶谷 2006 年 6 月 29 日  
オオムラサキ♀成虫 1 点  
貝塚市梶谷 2006 年 7 月 7 日  
ミドリシジミ♂成虫 1 点  
貝塚市蕎原 2006 年 5 月 24 日  
ミドリシジミ♀成虫 1 点  
貝塚市蕎原 2006 年 6 月 1 日  
以上、幼虫からの飼育個体 4 点  
日付は羽化日

- ◆高野晴一郎さんより  
ナミアゲハ成虫 1点  
貝塚市二色 2006年8月28日採集  
セアカフタマタクワガタ成虫 1点  
飼育個体  
クロモンサシガメ幼虫 1点  
シロヘリクチブトカメムシ成虫 2点  
貝塚市千石荘 2006年9月30日採集
  - ◆用松亮介・真鍋誠志郎さんより  
フタモンアシナガバチの巣  
貝塚市二色 2006年9月7日採集
  - ◆石川太我さんより  
ミヤマクワガタ♂成虫 1点  
和歌山県清水町 2006年8月14日頃採集
  - ◆村井さとみさんより  
ショウリョウバッタモドキ♀成虫 1点  
貝塚市千石荘 2006年9月30日採集
- <植物>
- ◆花野晃一さんより  
ウミヒルモ  
兵庫県洲本市由良 2006年9月3日採集
- <画像>
- ◆中島徹夫さんより  
シロスジカミキリ成虫 1点  
貝塚市三ツ松 2006年7月下旬撮影
  - ◆石井葉子さんより  
コウベモグラ 1点  
貝塚市蕎原 2006年6月17日撮影

## ■遊学館スタッフ日誌

8月4日、二色の山本貴康さんより「日本のものとは思えないクワガタがいた」という連絡を受け、持参していただきました。8月2日に二色合同宿舎の自転車置場を這っ

ていたそうです。インドネシアに生息するオオキバフタマタクワガタ *Hexarthrius mandibularis* のオス成虫で体長は82mmもありました。誰かが飼育していたものが逃げ出したのだと思います。日本のクワガタの生態に影響を及ぼす恐れがあるので、外国産のクワガタを飼育している方は逃げ出さないように十分注意してください。(岩)

8月30日、石井葉子さんより貝塚市内でツバメの集団ねぐらを発見した、とのこと。詳しい報告は16ページにあります。来年はぜひ観察会をしましょう！(西)

9月7日・8日、貝塚市立第4中学校の2年生4名が当館で職業体験を行いました。好奇心いっぱい、飼育している生きものの世話などをしてくれました。とくにエサやりには熱心で、生餌が必要なタツノオトシゴの仲間には、二色浜でヨコエビを採集するなど苦労している(楽しんでる?)ようでした。(浩)

自然遊学館だより 2006 秋号 (No. 41)

貝塚市立自然遊学館

〒597-0091

大阪府貝塚市二色3丁目26-1

Tel. 072 (431) 8457

Fax. 072 (431) 8458

E-mail: shizen@city.kaizuka.lg.jp

<http://www.city.kaizuka.lg.jp/shizen/index.htm>

発行日 2006. 10. 18

この小冊子は庁内印刷で作成しています。